

ソビエトスローガンの詩学¹

高橋 健一郎

はじめに

ロシア革命後から 1920-30 年代にかけてロシアの政治、社会、文化は大きく変動した。その変動は言語生活とも密接に結びついているが、最も大きな変動は、大衆に対する宣伝・煽動の言葉があらゆる場に浸透したことであろう。そのような言葉の中で主要な位置を占める言語形態の一つにスローガンがある。ソ連社会では道路や学校、職場などあらゆるところにスローガンが掲げられたほか、毎年メーデーや革命記念日など国家の重要な記念日に際して新聞などで数十ものスローガンが発表されていた。まさに「スローガンはソビエト政権の時代に日常生活の一部となったのである」(∞лтунян 1999: 173)。

ソビエトのスローガンに関する本格的な論考は筆者の知る限り三つある。一つはアメリカの社会学者 H. D. ラスウェル (H. D. Lasswell) らのグループが行った「内容分析」(Content Analysis) と呼ばれる社会学的な量的分析であり、それは 1918 年から 43 年までのメーデーのスローガンをいくつかのタイプに分け、タイプ別の出現頻度をグラフ化して言語形態とソビエト社会の動向との相関関係を分析したものである (Lasswell et al. 1965: 233-297)。二つ目は、1980 年に執筆され、1988 年に発表されたソ連の記号論学者 Ю. И. レーヴィン (Ю. И. Левин) による「ソビエトスローガンの記号論」(Левин: 1998 [1988]) である。それは 1980 年のスローガンを資料とし、主にその形式に焦点を当てて、スローガンというテキストの形式を明らかにしている。このレーヴィンのスローガンの形式的分析を部分的に批判しながら、スローガンのテキスト中の形象がその内に抱えこんでいる論理構造を捉えることこそが重要であり、そのためにはイデオロギー的・社会的コンテキストを踏まえた分析が必要だと主張するのが三番目の A. G. アルトゥニャン (∞. Г. ∞лтунян) の論文「政治ディスコースにおけるスローガン」(∞лтунян: 1999) である。

本稿の目指すものは、ラスウェルらのような量的分析ではなく、言語科学・記号論の立場からの質的アプローチであり、さらに、簡単に言えばレーヴィンとアルトゥニャンの主張を統合する立場である。つまり、まずスローガンを「ことばのジャンル」として考察し、その機能と形式を考察する。その上で、当時の公的言説のシステムの中にスローガンというテキストをおき、その言語形式によってどのように制約されながら具体的なテーマの語りが展開し、それが公的言説の中でどのような位置を占めるのかななどを考察するのが本稿の目的である。ソビエトのプロパガンダの言葉(いわゆる「ソビエト語」)についての研究は近年多く出されており、それは広義の「文化学」的な観点

から歴史や社会を読み解こうという近年の学問的流行とも部分的に重なるものでもある。しかし、「ソビエト語」研究に関して言えば、「ソビエト語」なるものの一般的な言語的特徴、あるいは個々の修辞技法にふれただけのものがほとんどであり、何らかのテキスト理論に基づき、あるテーマがテキスト・タイプ(つまり「言葉のジャンル」)のふるいにかけて、どのようにテキスト化されていくのかという点に着目する研究はほとんどないのが現状である²。本稿はスローガンという「ソビエト語」の重要なジャンルの性格をある程度整理したうえで、その性格に従っていかに具体的な物語が展開するかを分析する。

具体的には1936年のメーデーに際して4月22日に『ブラウダ』紙の第一面に発表された60のスローガンを基本的な資料とする。ソ連史においては1934年1-2月の第17回党大会から39年3月の第18回党大会までの5年間は社会主義建設の決定的勝利の時期と呼ばれ、強固なソビエト体制が確立した時期である。特に、多くの産業部門で先進的労働者の生産性向上運動が展開され始め、スターリンをして「同志たちよ、暮らしが良くなった。暮らしが楽しくなった」と宣言させた1935年から、「社会主義建設の勝利」の象徴とも言われる新憲法が採択される36年12月にかかる時期はその絶頂期と言ってもよい。また、この時期はドイツをはじめとするファシズム勢力が台頭した時期でもあり、ファシズムの攻撃をいかに阻止するか、巧妙な外交政策が求められた時期でもあった。このように、1936年のメーデーのスローガンは、国民に「社会主義建設の勝利」を宣言する必要があり、外国からの攻撃への警戒心を訴えなければならないという意味において、非常に重要なスローガンを含むはずであると言える。本稿では、60のスローガンをこのような社会的、イデオロギー的なコンテキストにおき、スローガンの言語的特質というふるいを通していかなるテキストとして機能していたかを分析する。

1. ジャンルとしてのスローガン

1.1 スローガンの機能

スローガンはどのような機能を果たしているのだろうか。ロマン・ヤコブソン (Roman Jakobson) の有名な「言語の六機能図式」の分類 (Jakobson: 1981 [1960]) に従えば、特に重要だと思われるのは「動能的」(conative) 機能、「交話的」(phatic) 機能、そして「詩的」(poetic) 機能である。

1.1.1 動能的機能

ソビエト政権成立以来の国家の最大の課題の一つが大衆の教育、つまり宣伝・煽動であったことは言うまでもない。国民のほとんどが文盲の農民であったソビエト・ロシアにおいてはマルクス主義的な思想を普及させるために様々な努力がなされ、その結果新しい言語生活に定着したのが「スローガン」である。その最も重要な機能は疑いなく「動能的(働きかけ)機能」であろう。つまり、相手に対する呼びかけである。スローガンは言うまでもなく革命以前から存在していたが、しかしながら新聞というマスメディアを通じて、国家の上層部から国民一人一人へと「呼びかけ」、それを国民一人一人が受け止める、という言語活動の形態がロシアの言語生活の中で成立したのは少なくとも1920年代以降のことであり、本格的な成立は、新聞機構が整備され、識字率が飛躍的に高

まった 1930 年代のことであった。

L. アルチュセール (L. Althusser) が指摘するように、呼びかけとは諸個人の間から主体を《徴募》し、諸個人を主体に《変える》ような操作のことである(アルチュセール 1992 [1970]: 87)。つまり、人間は単に生物学的な生命体としてのみ存在するのではなく、人に呼びかけられ、それに応答する可能性をもつ存在であると認められることによって初めて、名前やカテゴリーを与えられる社会的存在となる。その意味で、あらゆる場面で不断に繰り返されたスローガンという呼びかけ行為はその都度ソビエト国民を主体化していく機能ももったのである。

1.1.2 交話的機能

B. マリノフスキー (B. Malinowsky) の用語にちなんでつけられた「交話的機能」とは、コミュニケーションの接触を志向するものであり、メッセージの内容よりもコミュニケーションが成立すること自体を目指す働きである。つまり、そこで重要なのは、何を言うかというよりも、とにかく何かを言うという事実である。この機能が典型的に見られるのは日常の挨拶だが、政治の言葉においても大きな役割を果たすことがある。言語学者 M. A. クロンガウス (M. ∞. ∫ ронгау◇) が 1970 年代のソ連の言語について論じた「成熟した社会主義の時代における言語の無力」(∫ ронгау◇: 1994) の中で、言語の儀式化、脱意味化の例の一つとして挙げているアレクサンドル・ガーリチ (∞. ∞. ≥алич) の歌は、ソ連の政治言語における「交話的機能」をよく示している。その歌には模範的なソビエト労働者であるクリム・ペトローヴィチ (∫ лим Петрович) が登場し、彼の言葉として歌詞が語られる。彼はイスラエルの軍国主義に反対する集会で発言することになるが、そこで間違っ て割りあてられた原稿を読み上げてしまう:「イスラエルの軍国主義は世界の人々に周知の事実です! 母親として、女性として、私は彼らが責任を取ることを要求します! 未亡人となって何年もたち、幸せもすべて過ぎ去りました。でも私は立ち上がる決意があります。平和のために! …」。女性形で書かれた原稿の誤りに気づいた者は聴衆の中にはおらず、発言者は喝采を浴びながら演壇を降りた——これはメッセージの内容の重要性が最小限になる、いわゆる「言語の儀式化」の例であり、ソビエトの政治言語においては特に重要な機能を果たしていた。

すでに述べたように、ソ連社会ではスローガンは日常生活の一部であった。スローガンはその時代時代の政治状況を伝え、国民に行動を呼びかけるものとして重要であっただけでなく、コミュニケーションの経路を維持しておこうとする、すなわち機会あるごとに何らかのスローガンが出されるはずであるという大衆の期待を満足させるという機能も同時に果たしていたということは指摘しておく意味があるだろう。その意味で、スローガンの内容に実際に耳を傾ける者が少ないという理由でスローガンを効力のないものとする見方は一面的である。スローガンが発表される、そのこと自体がすでにソビエトの言語生活にはなくてはならない要素であり、一つの効力を持っていたからである。

1.1.3 詩的機能

芸術作品に特徴的な詩的機能は言葉の社会的役割とは一見無関係であるように思われるが³、しかしヤコブソンが詩的機能を説明するために挙げている例が、1950 年代のアメリカ大統領選挙にお

けるアイゼンハワー陣営のスローガン“*I like Ike*”であったことを思い起こす必要がある。ヤコブソンの説明をごく簡潔にまとめれば、“*I like Ike*”においては、*/ay/* という二重母音が三回繰り返されることによって、“*I*”、“*like*”、“*Ike*”が「等価性」をもつ。つまり、本来何の共通の意味特徴ももたないはずの語同士が、音の類似性により一つの範列をなし、人はそれらの間に何かしらの共通点を見出してしまうのである。さらに、“*I like/Ike*”という二つの単位 (colon) は互いに脚韻を踏み、韻を踏む二語のうち第二のものは第一のものの中に完全に含まれている。つまり、*like* という語の中にすでに *Ike* という対象が含まれ、人は「必然的に」*Ike* を好きにならざるを得ないという状況が、音韻構造の上で演出されているのである。このように、政治の言葉と詩の言葉は決して互いに無縁なわけではない。

1.2 スローガンの形式

ソ連で発表されたスローガンは、宣伝・煽動という明確な目的をもった言語ジャンルであり、それは一定のイデオロギーを内包している。それが実際に効力をもったか否かは別として、一つの言語世界を形作っているのは確かであり、ここではレーヴィンにならってそれを「スローガンの言語世界」(лобунговый универсум)と呼ぶことにしよう(Левин 1998: 551)。スローガンの言語世界における究極的な目標は言うまでもなく「共産主義の達成」であり、そのための下位目標である「計画の遂行」や「敵の殲滅」というような具体的な行為、対象は最終的には必ず「共産主義の達成」の観点からプラスの評価を与えられるものである。このような視点から、1936年のメーデーのスローガンを資料とし、スローガンの基本的な形式を整理してみよう⁴。

最初に、スローガンの言語世界においてどのような語彙がプラスとマイナスの価値を帯びるのかを確認しておきたい。プラスの評価を伴う語彙は大きく分けて二つのクラスに分かれる。第一のクラスは、ソビエトの公的言語体系において「絶対的な善」と認められている語彙群である。このクラスには、30年代半ばに関して言えば、例えば「レーニン」、「党」、「共産主義」、「社会主義」、「プロレタリア国際主義」、「祖国」、「赤軍」、「スタハーノフ運動」、「プロレタリア」、「労働者階級」などが属する。これらの語彙群は、ソビエトの全時代を通して絶対的な価値をもつもの(「レーニン」「党」など)のほかに、当時の言説の評価体系に照らし合わせて初めて意味をもつ語彙もある。これらの語彙のほかに第二のクラスがあり、それは普遍的にプラスの評価を伴うと考えられる語彙、例えば「平和」、「正義」、「自由」などである。

マイナスの評価を伴う語彙も同じく二つのクラスに分けることが可能である。第一のクラスはソビエトの公的言説において「悪」というレッテルを貼られている語彙であり、例えば「資本(家)」、「ファシズム」などが挙げられる。また、「飢え」、「貧困」、「失業」などのように、一般的・普遍的に「悪」とされる語彙群もあり、これが第二クラスを構成する。

これらの語彙を基礎にして、あらゆるスローガンが一定の形式に則って、国民に行動を呼びかけ、対象に賛辞を送る。次にスローガンの具体的な形式を一つずつ整理してみよう。レーヴィンが分類しているとおり、スローガンの形式は伝達機能の点で 事実確認、賞賛、命令 の三つのタイプに分けることが可能である。また、新聞のスローガンなどのように比較的長い(いくつかの文からなる)スローガンの場合、それらを組み合わせて一つのスローガンをなしているものも存在する。

1.2.1 事実確認 型スローガン

これは文法的には主に叙実法によって表現される型であり、典型的なのは「ファシズムとは労働者階級に対する資本家階級の攻撃である！」(5)⁵のように、何かを定義づけるタイプである。定義の対象となるものは、スローガンの言語世界において有意味なもの、つまり 主体 であるソビエト国家、党、人民など、あるいは内外の 敵対者 である。また、「資本主義諸国、ファシズム諸国では何百万もの労働者と農民が飢え、貧困、失業を運命付けられている。ソ連邦ではソビエト政権が失業を根絶し、すべての勤労者に対して豊かで文化的な楽しい生活への広い道を開いた」(4)のように、主体、敵対者の行為や状態を述語動詞によって記述するものも存在する。しかし、上で確認したように、スローガンの主要な機能が動能的機能であることを考えれば、このような純粹な叙述タイプの 事実確認 型だけで構成されるスローガンはほとんどないことが予想される。実際、このタイプは他の型と組み合わせられて現れることが多く、例えば、(4)のスローガンはその後「全世界のプロレタリアと農民よ！ ソビエト連邦の労働者と農民の道を行け！」と 命令 型が続き、(5)もまた「万国のプロレタリアと勤労者よ！ ファシズムと戦争に対する闘いのための統一戦線に結集せよ！」と 命令 型が続く。また、「『われらは平和を擁護し、平和の事業を守っている。しかしわれらは脅しを恐れないし、戦争挑発者の攻撃に対しては攻撃で応える用意がある！』(スターリン)。ソビエトの平和政策万歳！」(13)のように 賛辞 型が続く場合もある。このように、 事実確認 型は 賛辞 や 命令 の「根拠」として示される場合が多い。

定義づけや記述タイプ以外の 事実確認 型としては、例えば「住宅建設はわれらの建設作業の先進的領域とならなければならない」(46)のように、機能的には 命令 型に近い「義務」のモダリティを伴うもの、さらに「共産主義は勝利する」のような「予言的」な機能を果たすものなどがある。

1.2.2 賛辞 型スローガン

これは主に「X 万歳！」(Да здравствует ≈!) と「X に挨拶を！」(≈-у привет!)、「X が発展、... することを！」(Пусть растёт... ≈!)、「X に栄光あれ！」(Слава ≈-у!) などという決まり文句によって表現されるタイプである。これは X に対して賛辞を送るものであり、X には当然スローガンの言語世界において非常に肯定的な評価をもつものしか入らない。しかし、このタイプには 事実確認 型の定義文が埋め込まれていることが多い。「ソ連邦の諸民族の平和的な勤労の強力な砦であり、ソ連邦の国境の確かな防衛者であるわれらが親愛なる無敵の赤軍万歳！」(Да здравствует наша родная, непобедимая } красная армия — могучий оплот мирного труда народов СССР, верный стра+ границ СССР!) (14) (強調は引用者による; 以下同様)の X にあたるのは下線部分だが、それはまさに「われらが親愛なる無敵の赤軍は、ソ連邦の諸民族の平和的な勤労の強力な砦であり、ソ連邦の国境の確かな防衛者である」という定義タイプの 事実確認 型のスローガンにほかならない。また「... であれ！」(Пусть...!) 型は、例えば「われらが親愛なる強力な赤軍が成長し、強くなり、技術を身につけ、鍛えられんことを！」のように、事実上 命令 型に近いこともある。

このように、他のタイプからの変形と考えられるものが多い 賛辞 型スローガンは、次のよう

な意味において最も「イデオロギー的」なタイプとも言える。事実確認型スローガンの場合、基本的には「XがYである」という定義文、あるいは「XがYをした」という「事実」を陳述する文であることは述べた。つまり、これは具体的な登場人物の行為あるいは様態を述べたものである。また、命令型も具体的な相手に対して具体的な行為を呼びかけるものである。それに対して、賛辞型のスローガンはただXというすでに所与である存在に対して賛辞を送るだけであり、具体的な登場人物と行為の「物語」とはならない。例えば、定義文が埋め込まれたスローガンも、連辞の《消去》という変形操作による同格用法により定義であることを離れ、すでに「自明な」こととして提示される。また「メーデーにソビエト政権への忠誠、われらの偉大なる祖国への忠誠を誓う若き赤軍の兵士たちに闘いの挨拶を！」(± оевой привет молодым бойцам] расной армии, присягающим 1 мая на верность Советской власти, на верность нашей великой родине!) (15) のような行動詞(分詞)構文も、「叙述」が「修飾」へと転換されることにより叙述性が《消去》される。つまり、ここでは所与のよいもの・悪いものイデオロギー的な価値がただ「すでにあるもの」、その存在の是非を問われることのない「自明なもの」として宣言され、反復され、確認されているだけなのである。その意味において、何かを説明しようとする事実確認型や、具体的な行動を呼びかける命令型と比べるとさらに「イデオロギー性」⁶の程度を高めた言語表現の型であると言える。

1.2.3 命令型スローガン

スローガンの三つの型の中で、最も数が多く、かつ多様な形式をもつのが命令型である。命令型を発信者—受信者の関係から見ると、「包括型」と「除外型」、そしてどちらとも決められない「中立型」の三種類に分けることができる。「包括型」とは一人称複数形での呼びかけであり(つまり発信者が「包括」される)、「除外型」とは二人称複数形での命令法による呼びかけ(つまり発信者が「除外」される)、「中立型」は動詞を伴わない、あるいは動詞の不定形など人称を特定できない呼びかけである。

さらに、主体の行為のタイプからは次の三つに分けることが可能であろう:《対象変化型》(主体が対象を望まれる結果に導く);《授受型》(主体が望まれる対象を受け手に与える);《自己変化型》(主体が望まれる状態になる)。

《対象変化型》の対象になり得るのは、ソビエトの公的言説においてよいものあるいは悪いものとされるものであるが、スローガンにおいてはよいものについてが圧倒的に多い。よいものは「生み出す」「実行する」「さらによくする」「守る」などの動作述語と結びつき、悪いものは「倒す」「批判する」などと結合する。

《授受型》の典型的なものは、受け手が「国」や「国民」であり、「国にもっとXを与えよ」という形式のものである。また、さらに抽象的な恩恵の授受表現である「Xを助けよ」という形式もここに含めることができる。

《自己変化型》は自動詞構文で表されるものであり、よいものに向かって「進む」、模範者に「従う」、よいものの中に「入る」、よいものに「なる」、よいもののために「闘う」というものが典型である。

1.2.4 スローガンの 変形文法⁷

スローガンの形式についての考察の最後に、贅辞型で考察した「イデオロギー性」に関わるスローガンの「変形文法」について触れておこう。これについては、イリフ=ペトロフ(Ильф-Петров)の短編小説『昼のホテル』(1934年)に描かれているスローガンの変換プロセスの例が示唆的である。この作品では、主人公が与えられた課題をやりたくないために、次々とスローガンを出して、仕事をしなくてすむようにする。その課題とは「道路を清掃せよ」というものであるが、それが主人公によって次のように変形されていく。

- ① 「道路清掃のための闘争を開始すべきときだ」
- ② 「道路清掃のための闘争の組織化のキャンペーンに参加しよう」
- ③ 「全ての者は清掃のための闘争キャンペーンの組織化計画の実現へ」
- ④ 「闘争キャンペーンの組織化計画遂行に関する闘争のキャンペーンの妨害者よ、恥を知れ」

「道路を清掃せよ」という最も基本的な命令型である最初のテーマから「闘争キャンペーンの組織化計画実現に関する闘争のキャンペーンの妨害者よ、恥を知れ」という最終テキストへと変形される中で、言語のレベルで何が生じているのだろうか。

まず、「道路を清掃せよ」から①「道路清掃のための闘争を開始すべきときだ」への変形を取り上げよう。ここでの基本的な変形操作は、まず《命令型から義務を表す無人称的事実確認型へ》の変形である。発信者から受信者に直接向けられる人称表現から、ここでは無人称の断定表現に移行することによって、特定の個人に向けられた「課題」がその個人から離れることになる。そして、もう一つの重要な変形操作は、「道路を清掃せよ」から「道路清掃」への《名詞化》である。この名詞化によって、人称、時制、モダリティーの概念が《消去》される。「道路を清掃せよ」では、二人称で呼びかけられる動作主と「道路」という対象の間の具体的な行為への呼びかけであるのに対し、「道路清掃」と名詞化されることで、それは現実にすでに存在するものとしての形をとることになり、ひとまとまりの「所与の概念」として提示されることになる。これが「動詞の名詞化」のもつ一つの魔力である。そして、単なる「道路の清掃」から「道路清掃のための闘争」へと「闘争」という要素の《添加》の操作が加えられていることも忘れてはならない。ここで《添加》されている要素「闘争」は下で見るように、スローガンのみならず、ソビエトの公的言語におけるクリシェである。ここでは、この《添加》という操作により、動作主がかかわるのは道路清掃のための「闘争を始める」というところになる。つまり、「道路を清掃する」のではなく、すでに周知の概念とされた「道路清掃」のための「闘争を開始する」ところに主体は移動する。こうして、もともとの「道路を清掃する」ところから主体の位置は遠ざかることになる。

①「道路清掃のための闘争を開始すべきときだ」から②「道路清掃のための闘争の組織化のキャンペーンに参加しよう」への変形における基本的な操作は《無人称的事実確認型から包括型の命令型へ》の変形である。こうして、自分に向けられた課題を「われら」の共同の課題へと変換することができた。また、ここでも《名詞化》が重要である。「闘争を開始する」という動詞表現から「闘争の組織化」と名詞化され、闘争を始めることが名詞によってひとまとまりの所与の概念として提示される。そしてここでもまた「キャンペーン」という要素が《添加》される。それによって動作主は「闘争を開始する」ところから「闘争の組織化のキャンペーンに加わる」ところへ

と移動することになり、「道路を清掃する」からの動作主の距離はますます大きくなっていく。

同様に、②「道路清掃のための闘争の組織化のキャンペーンに参加しよう」から③「全ての者は清掃のための闘争キャンペーンの組織化計画の遂行へ」への変形の基本操作も、まず《包括型の命令型から全員に対する命令型へ》の変形であり、行為遂行を社会の成員すべてに迫ることになる。そして、またここでも「キャンペーンに参加する」から「キャンペーンの組織化」への《名詞化》があり、また「計画の遂行」という要素が《添加》され、それに伴い動作主体の位置も初めの「道路を清掃する」からますます遠のいていく。そして、ここでは「道路」が《消去》され、ただの「清掃」になってしまっているところにも注意しておこう。すでに何を清掃するのかには関心が向けられなくなっているのである。

そして最終テキストの④「闘争キャンペーンの組織化計画実現に関する闘争のキャンペーンの妨害者よ、恥を知れ」への変形操作は、このスローガンを妨害する「敵対者」というこれまたクリシェ的な要素の《添加》である。ここでは、もはやももとのテーマである「道路を清掃する」は完全に《消去》され、ただ敵対者が批難されるだけである。

これはフィクションであり、実際に一つのスローガンがこのような変換図式に則って変形されていたわけではないが、この変換図式は言語の「イデオロギー性」の一側面をよく示している例でもある。ここで示されているのは、具体的な行為がいかに自明の所与、つまりイデオロギーとされていくのかということである。それはスローガンの型の《転換》、名詞化による人称・時制・モダリティーの《消去》、クリシェの《添加》、テーマの《消去》などの操作によって可能となっていた。これらの操作は以下で具体的なスローガンを分析する際にも心に留めておく必要がある。

2. スローガンの言語世界

これまでは主に個々のスローガンの形式的な側面に焦点を当ててきた。次に、視野を大きく取り、1936年のメーデーに出された60のスローガンが全体としてどのような物語を構成しているかという点を考えてみたい。一つ一つのスローガンはそれ自体で完結しており、また非常に簡潔な言語形式であるために、そこには一連のイデオロギー体系、物語が凝縮された形で述べられ、あるいは明示的には示されないで隠れている。本節の課題は、そのようなイデオロギーの体系、物語の構成を復元し、その中でスローガンを考察することである。

1930年代に関して言えば、スローガンのテーマは、若干の例外はあるものの基本的に国際政治的テーマと国内経済的テーマの二つに大きく分けることが可能である。1936年に関しては、1番から13番までが国際政治的テーマ、14番以降が国内経済的テーマとなっている。それぞれのテーマに特徴的な物語をまず考察してみたい。

2.1 闘争の物語

国際政治的テーマについての1番から13番のスローガン(以下「政治スローガン」)についてまず考えよう。

1 番目のスローガンは

「国際プロレタリアートの革命的勢力の戦闘的閱兵式であるメーデー、万歳！」

(Да здравствует 1-е мая — боевой смотр революционных сил международного пролетариата!)

という 賛辞 型であるが、ここで重要なのは「国際プロレタリアート」(международный пролетариат)と「戦闘的」(боевой)という語である。メーデーの性格上それが国際的な労働者階級の連帯を意図したものであるのは当然としても、「戦闘」という語が含まれるのは必ずしも自明のことではない⁸。賛辞 型の X の修飾語である「戦闘的」がプラスの価値を帯びることは言うまでもないが、「平和」というプラスの評価をもつ語彙と一般的に対義関係にある「戦闘的」という語が、どのような論理構造に従ってここでプラスの評価をもつのかは説明を要するだろう。

その手がかりは 2 番目以降のスローガンにある。2 番目のスローガンは 賛辞 型の「X に挨拶を！」形式による

「メーデーにあたり、階級の兄弟、ファシストのテロの犠牲者、資本主義の囚われ人にわれらのプロレタリアの挨拶を！」

というものである。ここで「階級の兄弟」、「犠牲者」、「囚われ人」に注目したい。上で見たように、「X に挨拶を！」形式における X は非常に高いプラスの評価をもち、ソビエト国家、ソビエト市民にとって非常に近い存在である人間、または人間の集団である。ここでは、人間の評価がまず「階級」という視点からなされ、そしてそれは「犠牲者」、「囚われ人」と名づけられる集団である。言うまでもなく、「犠牲者」や「囚われ人」は「加害者」を前提とする語彙であり、ここでの加害者は「ファシスト」と「資本主義」である。このスローガンには、「ファシスト」と「資本主義」という悪なる存在があり、それがソビエト国民にとっての「兄弟」に危害を加えた という語り、つまり《犠牲》の物語が凝縮されていると言える。

「万国のプロレタリアよ！ プロレタリア国際主義の事業を強化せよ！ 共産主義インターナショナルの旗の下に立て！ 新しい闘争と勝利に向かって前進！ 世界社会主義革命万歳！」(3)では、命令 型によって 主人公 と 犠牲者 の連帯を強調しつつ、《闘争》そして《勝利》が呼びかけられる。

4 番目のスローガンはスローガンとしてはめずらしく 事実確認 型の部分が長いものである：

「資本主義諸国、ファシズム諸国では何百万もの労働者と農民が、飢え、貧困、失業を運命付けられている。ソ連邦ではソビエト政権が失業を根絶し、すべての勤労者に対して豊かで文化的な楽しい生活への広い道を開いた。全世界のプロレタリアと農民よ！ソビエト連邦の労働者と農民の道を行け！ 打倒ファシズム！ 打倒資本主義！ 全世界にソビエト政権が栄えんことを！」

初めに資本主義とファシズムが事実上定義づけられているが、それは「労働者と農民」という「階級の兄弟」に「飢え、貧困、失業」を運命付けるというものである。つまりここでは「ファシズム」や「資本主義」という第一クラスのマイナスの語彙が、第二クラスのマイナスの語彙によって説明される。同様に、ソビエト政権もまた「豊か」「文化的」「楽しい」というような第二クラスのプラスの語彙によって説明付けられている。上で述べたように、事実確認型は実際には命令型や賛辞型のスローガンの「根拠」の役割を果たすことが多い。ここでは、第一クラスのプラスとマイナスの語彙が第二クラスのプラスとマイナスの語彙によってそれぞれ補強されることによって、極めて単純ながら強力な「根拠」が提示される。そこには、「階級の兄弟」が《犠牲》を強いられているからその状態を取り除かなくてはならない、という「必然的な」論理の流れが根底にあり、次の部分——つまり、ソビエトの労働者が模範者であり、他国の労働者つまり犠牲者がそれに従うこと、そして敵対者であるファシズムと資本主義を倒すこと、ソビエト政権が世界で栄えることを祈念すること——に「必然的に」つながっていくのである。言い換えれば、この4番目のスローガンは、《犠牲》の語りと《闘争》・《勝利》の語りを極めて圧縮した形でその内に含んだものであり、その意味で2番目と3番目のスローガンの繰り返しであり、さらにそれを補強するものであると言ってよい。

5番目もファシズムの定義づけからスローガンは始まる：

「ファシズムとは労働者階級への資本家階級の攻撃である！ ファシズムとは侵略戦争である！ ファシズムとは飢え、貧困、破壊である！ 万国のプロレタリアと勤労者よ！ ファシズムと戦争に対する闘争のための統一戦線へ結集せよ！」

ここでも、事実確認型によるファシズムの定義づけが「根拠」となり、《闘争》を呼びかける命令型に自然につながるが、その「根拠」が4番目とは若干力点の置き方が異なっている。(4)が「兄弟」の「貧困」などの《犠牲》に焦点を当てていたのに対し、(5)はより直接的な《被害》であり、それは労働者階級への「攻撃」である。これは第一クラスのプラスの語彙(「労働者階級」)に対する第一クラスのマイナスの語彙(「資本家階級」)の「攻撃」という、まったく説明の必要のない「悪事」にほかならない。そして、「戦争」、「飢え」、「貧困」、「破壊」などの第二クラスの語彙によって「ファシズム」は徹底的にマイナスの価値を付与される。したがって、このような《犠牲》・《被害》から《闘争》・《勝利》への一連の物語においては(5)の「ファシズムと戦争に対する闘争のための統一戦線」は当然プラスの価値を帯びることになり、ここからも、(1)の「戦闘的」という語がプラスの価値をもつことが説明される。

「平和の敵は密かに活動しており、戦争は突然勃発するかもしれない。万国のプロレタリアとすべての勤労者よ！ 戦争挑発者に対する闘争のために団結せよ！ 平和のために、社会主義のために！」(6)もこれまでのスローガンと同様である。ここではただ敵対者が「平和の敵」、「戦争挑発者」と表現されていること、そして最後の「平和のために、社会主義のために」に注意しておこう。「平和の敵」によって、「われら——平和/敵——戦争」という等式が成り立ち、また「平和のために、社会主義のために」という並列表現によって、「平和」と「社会主義」の間に同義関係

が生まれている。このようにして、「主人公 —— 社会主義 = 平和、豊かさ、文化的、幸福な生活」と「敵対者 —— ファシズム、資本主義 = 戦争、貧困、飢え、失業、破壊」という、これまでの物語のまとめの等式ができあがる。

(7) 以降のスローガンはこれまでに出来上がっている物語をただ補強するものである。例えば(7)、(8)、(9)、(11)は外国の「兄弟」たちへの 賛辞 のほか、連帯を呼びかけるスローガンであり、(10)は「日本の軍国主義」という敵による《被害》とそれに対する《闘争》への呼びかけである。

(12)は「『他人の土地は一寸たりとも望まない。しかし、自分の土地はわずかでも誰にも渡さない』というスターリンの言葉、そして(13)もまた「『われらは平和を擁護し、平和の事業を守っている。しかしわれらは脅しを恐れないし、戦争挑発者の攻撃に対しては攻撃で応える用意がある!』(スターリン)。ソビエトの平和政策万歳!」とスターリンの言葉を含んでいる。これは、「平和」と「闘争」という一見相反する語彙がともに われら の属性であり、ともにプラスの価値を同一の言説の中でもつことに対する説明であり、これまでの「闘争の物語」の根底にある論理構造をスターリンという当時のソ連社会における最高の権力者の言葉によって権威付けし、補強しているのである。

ここで分析した「闘争の物語」は、実はソビエト国家形成期以来、公的な言説に支配的な物語の一つのパターンであった。そこでは世界は「階級」によって厳然と区分され、プロレタリア階級という主人公(あるいは犠牲者)と敵対者をめぐって物語が語られる。第一のテーマとして敵による犠牲者の《被害》が語られ、次に第二のテーマとして主人公と敵が《闘争》をし、そして第三のテーマとして主人公が《勝利》し、新しいユートピア世界へと《前進》していくという非常に単純な勧善懲悪の物語の形で進展する。第一のテーマでは敵と犠牲者の間の不均衡な力関係が強調され、第二のテーマでは主人公の「善」なる特徴が強調され、第三のテーマでは「建築物」や「道」のメタファーなどにより「目標」が明確に示され、実際のテキストでは第一から第三のテーマへの移行が必然的なプロセスとして展開されるように論理が構成されている⁹。ソ連の歴史のそれぞれの時期においてこの「闘争の物語」の重点の置き方は異なるが、この1936年の時期にあつては、それぞれのテーマを満遍なく強調しつつ、しかし第二の《闘争》、しかも「敵」による一方的な「戦争」の危険性が前面に出されていると言えよう。そこでは、「階級の兄弟」の《犠牲》を救うという20年代半ば頃に強調された物語は必ずしも重要ではなく、主人公(絶対的な善)に対する敵対者の「攻撃」への恐れが根底にあるようである。

このような1920年代以来の「闘争の物語」を1936年の一連のスローガンの中からも抽出したが、スローガンという非常に簡潔な言語ジャンルにおいては、このような物語が実際に「物語」として語られているわけではないことは、これまで見てきた通りである。物語の構造というのは文の構造とかなり類似した構成原理が働いており、それは基本的には「どのような誰が何をした」という一つの文の形で要約することが可能である。しかし、賛辞型では叙述性、つまり物語性が失われ、ただの名詞句表現がプラス(あるいはマイナス)の価値を伴って提示されるだけであり、命令型もただ《闘争》を呼びかけるだけであり、事実確認型の大半はこれらの根拠としての役割を果たすだけで、物語はその中に自明なる「前提表現」として埋没していることが多い。この意味でス

ローガンは基本的に言葉のイデオロギー的な価値をただ反復し、物語性を失った物語を再生産し、強固なものにしていく言語ジャンルであると言えるだろう。

2.2 英雄の物語: 「カードルがすべてを決定する！」

次に考察する物語構造は(14)から始まるいわゆる「経済スローガン」に見られるものである。これはすでに述べたように、様々な職業に就くソビエト市民に対する個別の賛辞であり、呼びかけであるが、そこに見られる「英雄譚」をここでは見てみることにしたい。

まず、19番目のスローガンを取り上げてみよう:

「われらが祖国の誇り高きハヤブサたるソビエト飛行士、万歳！ 若者よ、飛行機へ！ 飛行技術を完全に学べ！」

すでに述べたように、「ソビエト語」においては基本的に評価体系が「善/悪」に分かれ、スローガンにおいても語りの対象はそのイデオロギー的な評価によって、プラスとマイナスのどちらかにはっきりと分けることが可能である。「...よ、Xへ！」は命令型のクリシェの一つであり¹⁰、Xは当然非常に高いプラスの価値をもつ。従って、このスローガンの「若者よ、飛行機へ！」における「飛行機」はプラスの価値を帯びるはずであるが、しかしなぜそれがプラスの価値を帯びているのか、少なくとも現代のわれわれにとっては説明を要するだろう。

1930年代のソ連社会では、飛行士に関わる一連の事件が盛んにマスメディアを通して語られた。その発端となったのは、1934年の春に北極探検中に氷に閉ざされた学術探検船「チェリユスキン号」の乗組員を飛行士が大陸に救出したという事件であり、その後も30年代の終わりまで飛行に関わる様々な「偉業」が達成される。これらの事件について新聞の大々的な報道キャンペーンが繰り広げられ、ソビエト飛行士は一躍スターの座につくことになった。報道においては、単に偉業の報告だけではなく、飛行士仲間の談話や、飛行士の人となり、またスターリンとの面会の様子などが書き立てられ、まさしく一種の「メディア・イベント」の様相を呈するようになる。

この時代の飛行士の「英雄神話」がソビエト市民の間にロマンティックな想像を掻き立て、「国家」を想像させ、ナショナリズムの感情を沸き立たせるのに大きな役割を果たしたという指摘はすでになされており、西側の研究者を中心として詳細な研究もいくつか出されている(≥юнтер: 1991, McCannon: 1998, Petrone: 2000)。それらの分析によれば、飛行士の遠い地への遠征についての英雄物語を通して人々は想像力を掻き立てられ、「外国」を想像するとともに自分たちの広い「国土」を想像するようになる。その国家とは、指導者スターリン(と党の他の指導者)を厳格かつ思いやりのある「父」とし、国(страна)、国土(земля)、祖国(родина)を優しい「母」とし(これらの語はロシア語ではすべて女性形である)、英雄たちを忠実なる「子供たち(息子たち)」とする「大家族」のモデルによって理解される。このような神話がメディアによって生み出されることと並んで重要なのは、1934年には「ソ連邦英雄」という称号が制定され、英雄に高額な俸給、入手困難な物資の特別な支給、アパートへの優先入居など様々な社会的特典が与えられるようになるなど、「英雄」が社会的に制度化されていくということである。

このような「飛行士英雄物語」の一部を構成するものとして「若者よ、飛行機へ！」というスローガンが存在していると考えなければならない。「飛行機」は上で述べたような「神話」における肯定的なコノテーションをまとった語であり、「飛行機へ」という呼びかけは、その神話の「息子たち」になれ、という直接的な呼びかけでもあり同時に、さらには社会的な特典を与える、という約束の「行為」でもある。

また、上で述べたように、スローガンの機能の一つに詩的機能があり、「若者よ、飛行機へ！」(Молодежь на самолеты!)というスローガンにもそれを認めることができる。「若者」(молодёжь)と「飛行機」(самолёты)は [ə_a_ó] という共通の母音をもち(母音反復)、また /m_l/ という子音も共通することにより(子音反復)、「若者」と「飛行機」の間にパラリズムが生まれ、両者はここで「等価」となる。こうして、このスローガンは「若者」と「飛行機」の間に等価な関係を生み出し、一連の神話報道、英雄の社会的制度化などに支えられながら、「若者」を「飛行機」へと向かわせる強烈な呼びかけとなっているのである。

1936年のメーデーの他のスローガンを眺めてみれば、国内経済スローガンの多くが同様の英雄物語と呼応するものであることが分かる。実際、1930年代は飛行士だけではなく、あらゆる分野において「英雄」が注目されていた時代であった。35年にはスターノフ運動という労働生産性向上運動が始まり、労働の諸分野において英雄が数多く生産されていく。そのような状況の中で、1935年5月4日、スターリンはクレムリン宮殿における赤軍大学卒業式での演説の中で、それまでの「技術がすべてを決定する」(Техника решает все)というスローガンの代わりに「カードル(幹部要員)がすべてを決定する」(Кадровые решают все)を新しいスローガンとして打ち出した(Сталин 1997: 61)。同年11月17日には第一回全ソ連邦スターノフ運動者大会においてスターリンはスターノフ運動を「現在の技術ノルマを克服し、現行の生産計画と収支を克服することを目的とする男女労働者の運動」と定義し、その運動者を、新技術を完全に習得した「新しい、特別な人間」(люди новые, особенные)であると強調している(Сталин 1997: 79-80)。これまで、ソ連社会はもっぱら技術の向上に注意を向けてきたが、これからはその技術を身につけ、実際に社会の建設を進めていく人員が重要であり、人間を評価することが大切だということである。一連の英雄報道、英雄の制度化とあいまって、この時期のソ連社会では「技術」から「人間」へと評価の対象が変わり、そして人間の主体的な意志、熱意などに注意が向けられるようになった。つまり、「人」の価値は「英雄行為」への能力によって決まるようになるということである。そのような点に注意しながら、実際に他のスローガンを見てみることにしよう。

経済スローガンの基本は 命令 型である。呼びかけの対象となるのは、「防衛産業の労働者と婦人労働者、技師と技手たち」(24)、「石炭産業の労働者と婦人労働者、技師と技手たち」(27)、「ソフホーズの労働者と婦人労働者たち」(41)などと非常に細かく細分化され、それぞれが個々のスローガンにおける動作主となる。

まず注目したいのは、命令 型の《授受型》スローガンである。典型的なのは

「ソビエトの冶金の労働者と婦人労働者、管理者と技師たちよ！ [...] 技術がわれらの祖国に与えることのできるものすべてを技術から搾り出そう！」(26)

「製糸工場とセルロース工場の労働者と婦人労働者、技師と技手たちよ！ [...] 国に高品質の紙をもっと与えよ!」(33)

「綿畑のスターノフ運動者と婦人スターノフ運動者たち、万歳！ 国に4000万ブードの綿を与えよう!」(38)

のように、受け手が「祖国」(родина)あるいは「国」(страна)の場合である。受け手が「国家」(государство)ではなく「国」(страна)や「祖国」(родина)であるという点は重要である。上で述べたように、英雄神話においては、女性名詞である「国」や「祖国」は「母」を象徴する。つまり、ここでは「息子と娘たち」である各産業分野の「労働者と婦人労働者たち」が「母なる国」に対して産物を与える存在となっている。そして、

「軽工業の労働者と婦人労働者、技師と技手たちよ！ ソビエトの国の市民のためにもっと多くの更紗、絹、ニット、靴を!」(35)

「ソビエトの商店の従業員と婦人従業員たちよ！ ソビエト市民の要求を誠実に文化的に満たすために闘え!」(45)

のように、受け手が「ソビエト市民」の場合もある((45)の場合は間接的な「恩恵」の受け手である)。この場合は、兄弟姉妹同士が「与え手/受け手」となる共生あるいは競争の関係が生まれるが、このようなスローガンの中にも「母なる国」と「子供たち」という「一大家族モデル」が見え隠れしていることが分かる。

しかしながら、むしろ注目すべきなのは「子供たち」の間の差違が生み出されている点、つまり「英雄」と「非英雄」の対立が生み出されている点であろう。まず、英雄的労働者たちは、「綿畑のスターノフ運動者と婦人スターノフ運動者たち、万歳!」(38)や「春の播種の計画をポリシェピキ的に遂行している社会主義の耕作地のスターノフ労働者たちに挨拶を!」(40)のように、賛辞型で賛辞を送られる。上で述べたように、賛辞型で取り上げられる対象は極めて高いプラスの価値をもつものだけである。こうして、労働者たちの中から、英雄的な労働者のみが取り出されて強調される。

また、一連のスローガンで頻繁に用いられ、強調されるのは「先進的」(передовой)、「模範的」(образцовый)、「指導的」(ведущий)という形容詞であることに注意しよう。英雄とみなされ、賛辞を送られるのは「先進的スターノフ運動者に見習え!」(27)や「輸送をこの国の国民経済の先端領域に変えている鉄道輸送労働者と婦人労働者、管理者、技師と政治将校たちにメーデーの挨拶を。[...] 鉄道輸送の先頭を行くスターノフ=クリヴォノス運動者、万歳!」(31)のように、自らが「先進的」であったり、自らの活動領域を「先端的」なものにしたりしている労働者である。つまり、「英雄/非英雄」という対立は「先進的(指導的・模範的)/追隨的」という対立に一致する。従って、非英雄である一般の労働者は英雄を模範としなければならない:

「労働者と婦人労働者、技師と技手たちよ！ [...] 生産の新しいノルマをスターノフ的

労働によって超過達成しよう! (24)

(Рабочие и работницы, ин+ енеры и техники! [...] Перекроем стахановской работой новые нормы выработки!) (24)

「製糸工場とセルロース工場の労働者と婦人労働者、技師と技手たちよ! スタハーノフ=ブローニンの作業方式の広範な展開によって製紙産業を社会主義建設の先端部門に導け!」(33)

(Рабочие и работницы, ин+ енеры и техники бума+ ных фабрик и целлюлодных ѳаводов! Широким раѳвертыванием стахановско-пронинских методов работы выводите бума+ ную промышленность в ряды передовых отраслей социалистического строительства!) (33)

の下線部の「... によって」という表現(ロシア語原文では造格で表される)は、スタハーノフやブローニンという英雄を模範とすることを意味している。

そして、「英雄」は「非英雄」から援助を受けるべき存在でもある。例えば「産業の管理者たちよ! 《スタハーノフ運動者がさらにスタハーノフ運動を展開し、ソ連邦のあらゆる州や地方に広く深く広める》(スターリン)のを助けよう。スタハーノフ運動の総業者の抵抗を打ち破ろう!」(『Мандиры промышленности! Помо+ ем «стахановцам раѳвернуть дальше стахановское дви+ ение и распространить его вширь и вглубь на все области и районы СССР» (Сталин). Сломим сопротивление сабота+ ников стахановского дви+ ения!』(23)の下線部分は与格動詞による一種の受益構文とみなすことができるが、スタハーノフ運動者という文字通りの英雄に対して「産業の管理者たち」が《援助者》の立場に立つことを要求し、恩恵の受け手は英雄となる。

「英雄 / 非英雄」の差違を強調すると同時に、最終的な目的は全員が英雄になるという点にあることも読み取ることが可能である。「石炭産業の労働者と婦人労働者、技師と技手たちよ! [...] 先進的スタハーノフ運動者に見習え [= 肩を並べよ]!」(27)は、英雄と同等なものになるように(равняйтесь)という呼びかけであり、「スタハーノフ的ヴィノグラードフ運動者を増やせ!」(35)は英雄を増やせという呼びかけである。つまり、「英雄 / 非英雄」の対立を解消することが最終目標なのである。

最後に 敵対者 の存在についても触れておこう。経済スローガンに表立った敵対者が登場するのは稀だが、1936年のスローガンには(23)、(47)、(49)、(50)にかなり明示的に「敵」の形象が現れる:

「スタハーノフ運動の総業者の抵抗を打ち破ろう!」(23)

「掌中の珠のように、ソビエト体制の基盤である公共の社会主義的所有物を強欲者、泥棒、怠け者たちから守れ!」(47)

「党と政府の指令の遂行状態の監査を強化しよう! 官僚的欠陥や機関の欠点に対する自己批判の火をさらに強く!」(49)

「ソビエトの国の勤労者たちよ! 死につつある階級の敵の残党が怒り狂い、われらの祖国を汚そうとしている。ブルジョアジーの残党を殲滅しよう! 甘い態度や不注意をなくせ! つねにどこでも警戒しよう!」(50)

ここでの敵は大きく分けて二つである。一つはもともと「われら」に属する者でありながら、プラスの対象を妨げるもの、害を与えるものであり、それは(49)のように「自分自身」であることもある。二つ目は「階級の敵 = プルジョアジー」である。

2.3 「闘争の物語」と「英雄の物語」の融合

最後に指摘しておきたいのは「闘争の物語」と「英雄の物語」の基本的な構造の相同性である。「闘争の物語」では「われら」が、すでに成功を収めている主人公と、そして未だ敵の犠牲になっている犠牲者とに分かれ、それらは「兄弟」とされる。犠牲者は主人公に従い、敵を倒しながら、未来の目標へと前進していく。一方の「英雄の物語」でもまた、国の息子娘たちが「英雄 / 非英雄」とに分かれ(つまり、「兄弟姉妹」である)、後者が前者に従いながら、目標を達成していく。そこでは、ともに「前進」という方向性が重要であることにも注意しよう。「新しい闘争と勝利に向かって前進！」(3)、「全世界のプロレタリアと農民よ！ ソビエト連邦の労働者と農民の道を行け！」(4)に見られるように、「道」の前方を行くのは主人公である。それは、「英雄の物語」において「非英雄」から「英雄」を区別する要素がその「先進性」、つまり「道の先を行く」ことであることに対応している。

また、(14)以降のスローガンはソビエト国民の様々な職業に携わるものへの個別の呼びかけとなっているが、(14)から(18)で最初に呼びかけられるのが赤軍兵士たちであることは極めて象徴的である。基本的には(14)以降の「経済スローガン」には敵対者が登場することは稀であり、表面的には善悪二元論的なスローガンとはならないことが多いが、しかし赤軍兵士への呼びかけであるスローガンは、やはり「闘争の物語」の枠組みから外れてはいない。例えば、「ソ連邦の諸民族の平和的な勤労の強力な砦であり、ソ連邦の国境の確かな防衛者であるわれらが親愛なる不敗の赤軍、万歳！」(14)は「X 万歳！」という典型的な賛辞型に「X は Y である」という定義を埋め込んだタイプのスローガンである。ここでプラスの価値を与えられている X は赤軍であるが、このスローガンで注目したいのは X を定義づける Y の構成要素である「平和的な勤労の砦」や「防衛者」、「不敗の」という表現である。アルトゥニャンが「ソ連邦は世界平和の砦である！」というスローガンの「平和の砦」という形象が必然的に「平和を脅かす敵」を要求し、それとの衝突つまり「戦争」を前提としている、と述べるように(∞лтунян 1999: 177-178)、プラスの価値を帯びる語彙もその背後に独自の論理構造を背負っているものである。この(14)のスローガンもまた、「砦」、「防衛」、「不敗」という一連の語彙の中に、「平和を脅かす敵」、「敵の攻撃」、「敵との闘争」が前提とされているといっていよい。(15)から(18)の赤軍兵士への呼びかけのスローガンはすべて同様である。その意味で、この(14)から(18)の「経済スローガン」もまた「闘争の物語」の枠組みの中に完全に納まっており、「闘争の物語」と「英雄の物語」の結節点となっている。

さらに、「闘争」という言葉が経済スローガンにも頻出することも指摘することができる。例えば「コルホーズ員と婦人コルホーズ員、ソフホーズの農業技師と作業員たちよ！ 年に7-8百万ブードの穀物の生産のために闘え！」(36)「食品産業の作業員たちよ！ 成功を確固たるものとし、発展させ、1936年の計画の超過遂行のために先頭を行く闘士となれ！」(34)のように「...のために闘

う) (「...のための闘士となる」というのは経済スローガンのクリシェの一つである。「目標達成」が《闘争》と《勝利》というアナロジーによってとらえられることは、根底で国内経済の問題もまた「闘争の物語」の基本構造によって規定されていることを含意している。

「闘争の物語」は基本的には階級の敵、あるいは外国の敵との闘争についての語りであり、「英雄の物語」は労働生産性を高めるための闘い、「盲目なる自然」を切り開くための闘いについての語りであるが、このようにソビエトの公的言説においては、両者が融合する傾向を見せるということはこれからの研究にとっても重要な視点となるだろう。例えば、この傾向は「われらの国の誇りであるソビエトのスポーツ選手、万歳！ 勤労と社会主義祖国の防衛に備える健康で陽気な世代のために！」(54)のように、スポーツという分野に国の防衛というテーマが直接滑り込んでいる点などにも見て取ることが可能である。実際、スポーツはソビエト時代を通して愛国主義と最も強く結びつき、英雄物語と闘争物語の境界が消える分野の一つであったが、それはスポーツ以外のあらゆる分野に浸透していたであろうことが十分に予想される。単純な善悪二元論的「闘争の物語」というソビエト・イデオロギーの基本的なパトスが様々な分野の言説に及び——こうして「ソビエト語」という壮大な言語世界が築かれていったのである。

参考文献

- ∞лтунян, ∞. ≥. (1999) Лобунг в политическом дискурсе // *От ±улгарина дод цриновского: Пдейно-стилистический анализ политических текстов*. М.: Р≥≥√. С. 173–183.
- ≥юнтер, ≈. (Günter, H.) (1991) “Сталинные соколы” (∞налиф мифа 30-х годов) // *∞просы литературы*, 1991.11–12, . 122–141.
- ∫ронгауф, М. ∞. (1994) ±ессиие яфька в эпоху фрелого социализма // *Σнак: Сборник статей по лингвистике, семиотике и поэтике*. М. С. 233–244.
- Левин, Ю. П. (1998 [1988]) Семиотика советских лобунгов // *Пфбранные труды: поэтика, семиотика*. М.: Школа «Яфьки русской культуры». С. 542–556.
- Сталин, П. ≤. (1997) *Сочинения. Том 14. Март 1934–1940*. М.: Пфд-во «Писатель».
- Jakobson, R. (1981 [1960]) “Linguistics and Poetics.” *Selected Writings 3*. The Hague: Mouton publishers. pp. 18–51.
- Lasswell, H. D., N. Leites, and Associates. (1965 [1949]) *Language of Politics: studies in quantitative semantics*. Cambridge / Massachusetts: The M.I.T. Press.
- Leech, G. (1974) *Semantics*. Harmondsworth: Penguin.
- McCannon, J. (1998) *Red Arctic: Polar Exploration and the Myth of the North in the Soviet Union, 1932–1939*. New York, Oxford: Oxford University Press.
- Petrone, K. (2000) *Life Has Become More Joyous, Comrades: Celebrations in the Time of Stalin*. Bloomington & Indianapolis: Indiana University Press.
- アルチュセール, L. (1993) 「イデオロギーと国家のイデオロギー装置」柳内隆訳 / 『アルチュセールのイデオロギー論』、文化科学高等研究院、7–111頁
- 高橋健一郎 (1998) 「ソビエト国家の『闘争の物語』の生成レトリック——1920年代の『ブラウダ』紙のメーデーの社説の言説分析」 / 日本記号学会編『聲・響き・記号』(記号学研究 18)、169–179頁
- 高橋健一郎 (2000) 「イデオロギー批判としての言語分析、あるいはソビエト語 作文小教程——K・チュコフスキ『生きている言葉』の言語学的読みの試み——」 / 東京大学言語態研究会『言語態』Vol. 1、41–52頁

高橋健一郎(2002)「ソビエト全体主義社会における言語に関する社会言語学的研究」/社会言語科学会『社会言語科学研究』第4巻第2号(近刊)

注

1 本稿は、平成13年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究「スターリニズムの言語のレトリック分析」(課題番号:13-05641)の成果の一部である。

2 「ソビエト語」研究の意義と問題点、また今後の展望に関しては拙論(高橋:2002)で詳しく述べておいた。

3 例えば、G. リーチ(G. Leech)はその著書『現代意味論』(*Semantics.*)第4章「意味論と社会」の中で、ヤコブソンの六機能図式にならないながら言語の機能を五つに分け、言葉の意味と社会について優れた論を展開しているが、そこでは言語の社会的役割に最も直接的にかかわる機能は心情的機能、指令的機能(ヤコブソンの「動能的機能」に相当)、交話的機能の三つであるとし、この詩的機能(リーチの用語では「aesthetic 美的機能」)については触れていない。

4 本稿で分析するスローガンは1936年4月22日付けの『プラウダ』紙第1面(Δ] ≤] П(б), *Правда*, 22 апреля, 1936 г., с. 1)に掲載されたものである。

5 スローガンの後につけられた丸括弧付きの数字は、1936年のメーデーに際して発表されたスローガンの番号であり、以下も同様である。

6 ここでいう「イデオロギー性」とは、一定集団の価値観や利害などを「正当化」し、「自明なもの」とするような力のことをいう。1. 2. 4の議論も参照されたい。

7 この項は拙論(高橋 2000: 45-48)に基づいている。

8 拙論(高橋:1998)で述べたように、メーデーの定義の中に「戦闘的」や「闘争」という語が含まれるようになったのは1928年のことである。1950年代にはこのような語はもう使われておらず、戦闘的な語彙によってメーデーが定義されるのはスターリン時代の特徴だと言ってもよいだろう。

9 「闘争の物語」に関しては、1920年代の『プラウダ』紙の社説を分析した拙論(高橋:1998)を参照。それぞれのテーマにおいてどのような局面に語りの焦点が当たるか、20年代を通してどのような変化があったのか、具体的なテキストがどのように構成されているかなどを論じている。

10 例えば、革命直後のスローガンに「プロレタリアよ、馬へ!」があり、(19)と比較すると面白い。